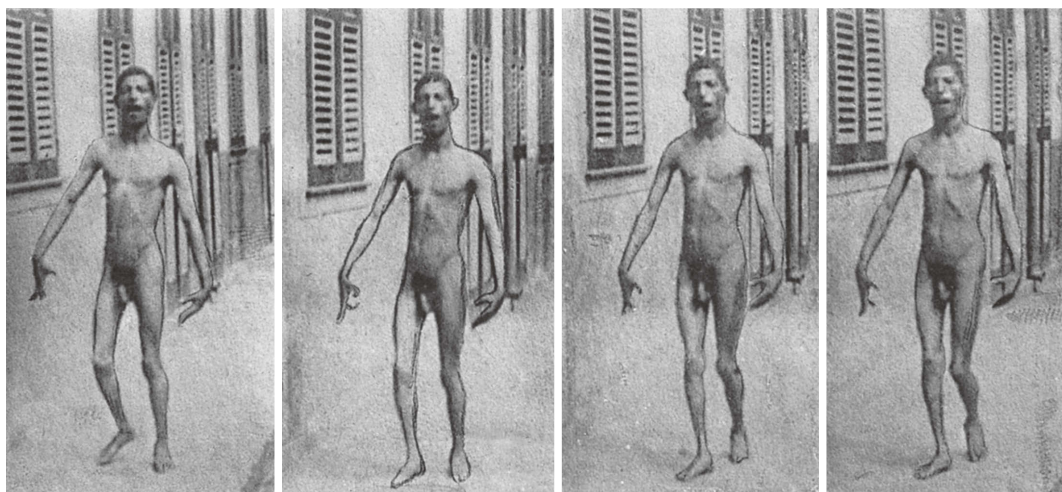




BRAIN and NERVE 70 (11) : 1310-1311, 2018

今月の表紙

河村 満^{a)}*

岡本 保^{b)}

菊池雷太^{c)}

さまざまな病的歩行の検討は、その診断的価値から常に神経症候学上大きな関心を引いてきた。実際に患者の歩行をみたり、ある症例では歩く音を聞くだけで十分で、とっさに罹患した疾患を認識できる。

今回取り上げる論文¹⁾はこんな一節から始まります。名医は、患者が診察室のドアを開け、椅子に腰掛けるまでに診断が済んでしまうと言われますが、神経学において姿勢や歩行はそれほど重要な所見を含んでいます。

前回の終わりに、写真から動画への流れについて言及しましたが、本論文ではついに動画を用いた研究が紹介されています（とはいえインターネットも

二次元バーコードもない時代ですので、提示されているのはご覧のとおり動画の各コマの写真ではありますが）。そして、動画の被写体、つまり研究の対象となったのが歩行であることは非常に得心がいきます。

病的歩行のいくつかのタイプは単に肉眼の観察で問題ないが、別の症例では十分にそれらを分析する必要がある。

また、歩行のタイプがどうであれ、この検討に慣れた眼のみがよく認識し把握することができる詳細があることは周知のことである。こうしたすべての点を分析するのに成功したのは写真の使用のおかげである。Richer, Londe らの素晴らしい業績を想起する必要があるのか？

(中略)しかし、今日では、この種の検討をするには映画術しかない。歩行の各相における四肢、体幹と頭部の姿勢の特殊性すべてを理解できるよう、1歩ごとに多数の映像を撮る。

さて、今回の写真が示しているのは「アテトーゼ歩行」であると書かれています。

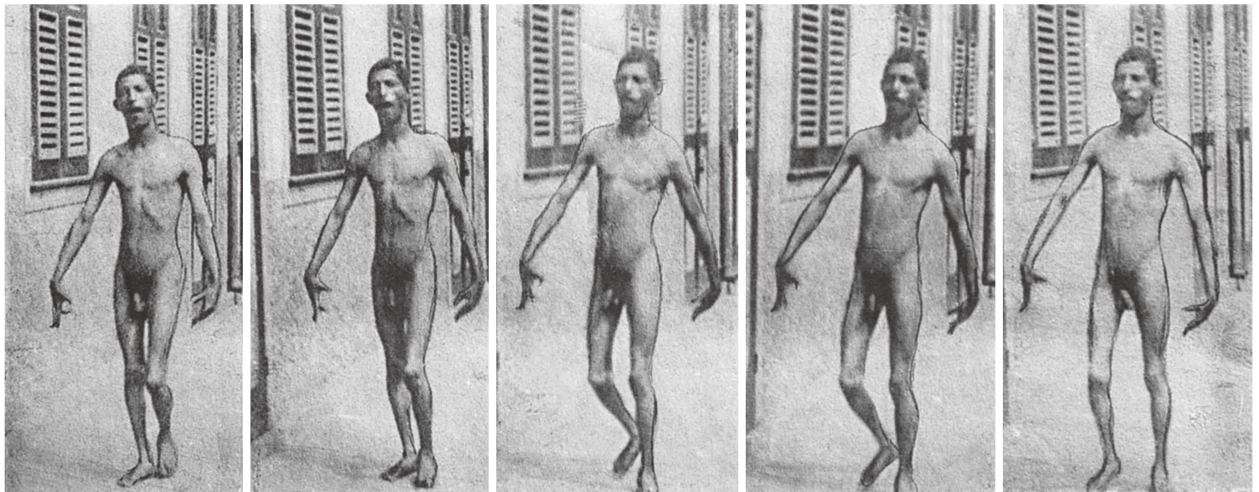
リオデジャネイロの一般ポリクリニクにおける筆者らの部門で映画撮映術を用いて、アテトーゼ歩行を分析する機会があり、非常に典型的で患者の歩行が完全に明示される映像をいくつか提示することが可能となった。

歩行がまったく不可能になる症例もあれば、歩行が少なからず容易にできる例もある。程度がどうであれ、それは常に痙縮性歩行（痙縮-アテトーゼ歩行）で、趾行性歩行となる場合さえみられ、痙縮現象が非常に著明なら患者は両膝を接近させ、つま先で歩くこともある。固さが増せば増すほど歩行はそれだけ困難となる。下腿の動揺中、膝の屈曲はやや減少し、歩幅が短くなる。

しかし、観察者を驚かせるのは、とりわけ体幹と上肢の姿勢である。重症例では上腕が体幹に密着する

a) 奥沢病院名誉院長, b) 富坂診療所, c) 汐田総合病院神経内科

*[連絡先] river7941@gmail.com



が、別の機会には、上腕と前腕が伸展し、側方に体幹から遠く離れるよう挙上し、歩行中、天秤のように動揺し、アテトーゼ運動のため手の姿勢が異常になる。

われわれは、上肢の肢位の偏倚が、患者たちがいっそう速く歩こうと情動的になるほど顕著にみられることを観察した。

この上肢の外転は、とりわけ歩行を前方や後方からみるとはっきりするが、常に動揺する下肢側すなわち体幹が傾く側の下肢の反対側に強く現れる。

体幹の動きに関しては、1歩毎に固定した下腿側に傾くが、この傾斜は正常歩行の単なる動揺に比べてはるかに幅が増強されており、この種の症例では、シャルコーが提唱した「鷄鶏類歩行」という呼称が表現として非常に適している。患者は《あひるのように》左右に揺すぶる。

このアテトーゼ歩行というのは何で

しょうか。デジュリン (Joseph Jules Dejerine; 1849-1917) の『神経症候学』²⁾によると、「痙縮性歩行のことである」と書かれています。「上腕が体幹に密着し前腕が上腕に対してやや屈曲するものが典型であるとともに、上肢が体幹から離れていく症例もみられる」とあります。

動画撮影技術を医療に取り入れる当時の試みは、現在で言うところのAIをめぐる試みに近いのではないかと想像します。いつか、患者が診察室のドアを開けて椅子に座るまでの間の挙動をAIがパターン認識し、可能性の高い診断名をサジェストしてくれる日が来るかもしれません。

ただ、今後AIを用いた研究の記録が何かしらの形で残るとして、それが1世紀後の人たちの鑑賞に堪えられるのかとさえいえるのでしょうか。ちょうど130年前に始まった『Nouvelle Iconographie de la Salpêtrière』がわれわれの心を揺さぶったようにいくでしょうか。ここに写真や映像というものの特

殊性があるのだと思います。

自らを「見る者 (un visuel)」と称したシャルコー (Jean Martin Charcot; 1825-1893) は神経学を追究し発展させただけでなく多くのフォロワーを生み出し、また当時の文化人をも魅了しました。その大きな源となったのは、芸術作品にみられる神経症候を指摘することや、絵や写真によって神経症候をとらえること、そして劇場型の講義を催すことなど、神経学に潜在する見せる力を最大限引き出したことにあるのだと思います。人間にとって見るという行為が何より魅惑的であることを熟知し、そして最も享受していたシャルコーだからこそできたのでしょう。

われわれが患者を見る／診る（この2つの言葉が同音であることも不思議です）ことの面白さにもう少し自覚的であるべきかもしれません。

文献

- 1) De Castro A: Note sur la démarche dans l'athétose, étudiée d'après la cinématographie. Nouv Iconogr Salpêtrière 25: 265-266, 1912
- 2) Dejerine J: Sémiologie des Affections du Système Nerveux. Masson, Paris, 1914, p482